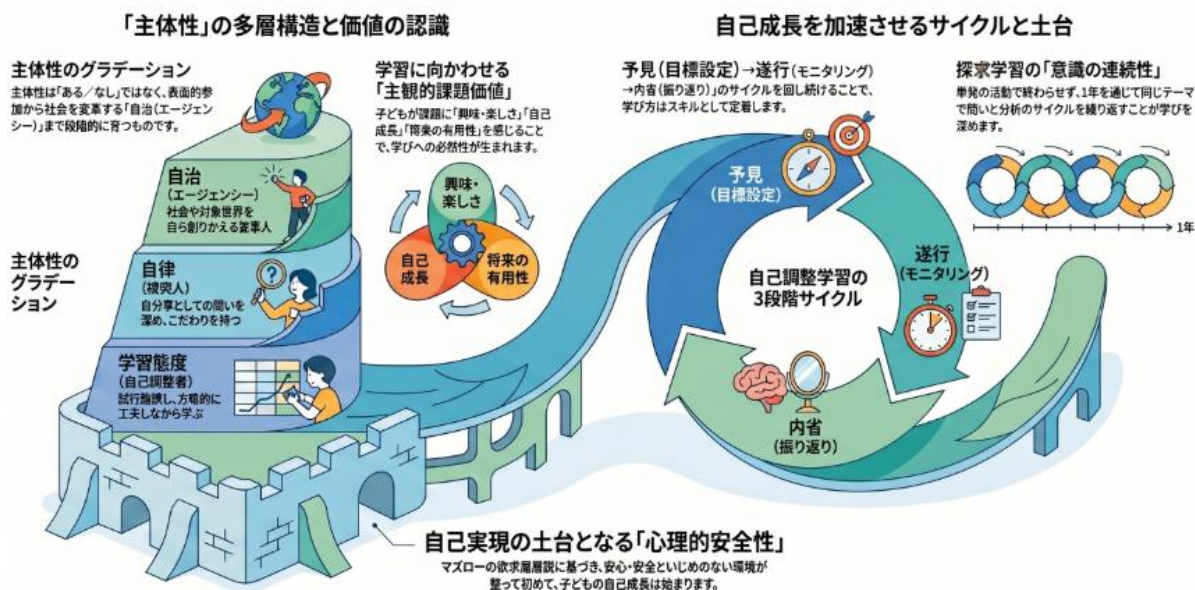


○四辻伸吾先生 大阪教育大学 大学院教職実践研究科

『子どもたちの主体性を育む9年間の学びを共に』

「主体性」を育む教育の設計図



1. 主体性を「グラデーション」で捉える

「主体性がある・ない」という二元論ではなく、主体性は段階的に育つものとして捉えることが重要です。

- 表面的な参加(外発的動機)から始まり、関心・意欲、学習態度(自己調整)、そして自ら問いを深める自律、社会に関与する自治へと高まっていきます。
- このように分解することで、目の前の子どもの実態に応じたアプローチが可能になり、教師同士でも「今日はここの段階を育てよう」と具体的に語り合えるようになります。

2. 学びの「入り口」：主観的課題価値を意識する

子どもたちがその学習に「向き合いたい」「解決したい」と感じるためには、『学びの必然性』が必要です。

- 興味価値（楽しい）、獲得価値（より良い自分になれる）、利用価値（将来役に立つ）といった価値を、子どもが主観的に感じられているかを意識します。
- 逆に、取り組むことが「面倒だ」と感じるコスト面も考慮し、教師は「この発問は何のためか」「この学習が何につながるのか」を常に問い続ける必要があります。

3. 学びの「過程」：自己調整学習のスキルを育む

「学び方」は態度ではなく、経験の蓄積によるスキルです。

- 『予見（目標設定）→遂行（モニタリング・方略）→内省（自己評価）』というサイクルを繰り返すことで、失敗しても立て直せる、他者をリソースとして使える力が育ちます。
- 特に、適度な心理的負荷を伴う『再チャレンジ』の機会を設けることで、子どもは前回よりも成長したという実感をつかむことができます。

4. 学びの「土台」：心理的安全性といじめ予防

主体的な学びの土台には、マズローの欲求階層説にあるような「安全の欲求」や「社会的欲求」の充足が不可欠です。

- 「感じ方の違いを価値づけ続ける授業」は、いじめ予防や学級風土づくりに直結します。
- 心理的な安全性が確保されて初めて、子どもたちは自分を出し、主体的に学びに向かうことができます。

5. 9年間の系統性：目指す子ども像の共有

義務教育9年間を見据え、「そもそもどんな子どもを育てたいか」という観（ビジョン）を全教職員で共有することが、最も重要です